

中国語を母語とする学習者の作文に見られる誤用分析

Error Analysis in Composition by Chinese Learners of Japanese

竹島 奈歩

要旨

本稿は、中国語を母語とする学習者の作文に見られる誤用例に焦点を当て、分析を行ったものである。学習者の作文において、選択した語自体に誤りがある例の多くは、母語の影響であると言えるだろう。では、選択した語が正しいにもかかわらず、誤用となる場合はどうであろうか。今回はそのような、選択した語は正しいが誤用となる例に限定して分析し、その原因を探った。その結果、原因は以下の四つにまとめられる。第一に、やはり母語の干渉によるものである。学習者が母語における品詞認識そのままに日本語でも使用していることから、多くの誤文が産出されることが分かった。第二に、日本語の文法法則を一般化させ過ぎたが故の誤用である。これは、特定の品詞でしか成り立たない法則を他の品詞に適用させた結果と言えよう。第三に、辞書の記載をそのままに用いたことに起因する誤用である。当然のことながら、外国語学習と辞書は切り離せないほど密接な関係にある。日本語母語話者であれば、語の説明や用例を必要に応じて取捨選択できるが、学習者にそれは難しい。外国語学習と辞書の使用をどのように上手にリンクさせればよいかは、今後も頭を悩ませる問題となろう。最後に、中国語には存在しない漢字語であるから定着までに時間を要し、誤文が生じたというものである。この点は、学習者の漢字習得・語彙学習に対する姿勢—無意識のうちに日中の漢字及び漢字語を同一視してしまう—を改めさせる必要もあるのではないかと考える。

キーワード

日本語 日本文化 中国語母語話者 漢字語 誤用分析 母語の干渉

1 はじめに

中国語を母語とする日本語学習者（以下、学習者と略す）が、中国語の漢字語などをそのまま日本語として用いたが故の誤りは、よく見られる。中国語で〈手紙〉（以下、中国語は〈 〉でくくって示す）とは日本語の「トイレットペーパー」を指し、〈爱人〉とは「妻（または夫）」を指すというのも、現代においては多くの日本人が知るところであろう。しかし、実際の日本語教育現場においては、日中同形語に関する誤用だけではなく、コロケ

ーション、語の形の誤用も目立つ。

本稿の主な分析対象である語の形の誤用とは、語の選択自体は正しいがその品詞を誤認したものや、形が正しくないことから誤用（或いは日本語らしくない不自然な表現）となるものを指す。果たして、これも母語の影響なのだろうか。或いは他の要素が原因となっているのだろうか。

本稿第四章では、上述の語の形の誤用例を分析し、第五章においては、母語の影響を大きく受けていると思われる選択した語自体に誤りがある例を分析する。

このような誤用分析から得た結果は、学習者へフィードバックする際に役立つのは言うまでもない。さらに、教師側が教える際にも間違いやすい点や間違える原因が頭に入っていれば、誤用を未然に防ぐことが可能であろう。本稿では学習者が書いた実際の誤用例を分析しながら、学習者が誤った形で用いるのは母語の影響であるのか、母語以外ではどのようなものが影響を与えるのか、母語以外の原因としてはいかなる要素が考えられるのかを考察する。

2 先行研究

日本語と中国語の対照研究は、古くは文化庁の『中国語と対応する漢語』（1978）に見える。これは日中漢字語の意味に焦点を当てた研究で、日本語の漢語を中国語の漢字語の、同形同義語（S : Same）、同形類義語（O : Overlap）、同形異義語（D : Different）、日本語の漢語と同じ漢字語が中国語に存在しない（N : Nothing）の四つに分類した。他方、中国語学の分野においても、中国語学の視座に立った同様の同形語に関する研究が行われてきた。

近年、中国からの留学生の爆発的な増加も手伝い、日本語教育分野においても中国語を母語とする学習者の誤用分析が盛んに行われている。中野他（1997a・b）による「中国人学生の日本語作文調査」及び「中国人の日本語文章における中国語の影響」は、中でも大規模な調査として挙げられる。この調査は、対象語・表現に何ら条件や限定を加えず、中国人学習者の書いた作文を添削し、まとめたものである。問題の生起する箇所は大きく以下の八つに分類され、それぞれが更にいくつもの下位項目に分けられている。

- ①表記
- ②文体
- ③語彙
- ④文法
- ⑤敬語
- ⑥文化、習慣
- ⑦母語の干渉

⑧表現（間違いではないが、日本語らしくないもの）

また、その分類結果から、母語の影響による問題を取り上げ詳細に考察している。それによると、学習者の誤用例の中で母語の影響だと思われるのは、以下の六点にまとめられる。

- ①共起する語と語の関係
- ②語彙の意味的カテゴリーの相違
- ③指示詞の相違
- ④主語の省略しすぎ
- ⑤表現についての習慣の相違
- ⑥その他（自他動詞の混用など）

このような大規模な調査の他にも、分析対象を「漢語副詞」と品詞で限定した石黒（2004）や、「社会科学分野で使われる日中同形語」と分野で限定した西谷（2004）、「～て（で）」と文法カテゴリーで限定した陽・川嶋（2009）、「回・帰・返・還」という漢語語基に焦点を当てた陳・杜（2010）などここ10年だけでも多くの研究がなされていることが分かる。このことは、言い換えれば、中国語を母語とする日本語学習者の数が非常に多いことの裏付けでもあり、これら学習者の誤用が「漢字」という共通項に端を発した単純な矯正を阻む問題であるからだろう。

3 分析方法

今回、筆者が中国（2003～2008年）と日本（2009年～）で担当した作文及び文章表現の授業において、中国語を母語とする学習者が書いた作文の中から用例を探した。その中から語の形の誤用と認められる例を挙げ、原因を分析・考察した。以下に挙げる誤用例は学習者が実際に書いたものであり、該当部分以外にも活用ミス、接続ミスなどが多々見られるが、本稿では語の形の誤用のみを分析対象とする。なお、それぞれの用例に性別、学習歴、日本語レベル、留学経験の有無の学習者情報を加えた。例えば、「男、2年、中級、無」は男性で日本語学習歴が2年、日本語レベルは中級で留学経験は無しである。留学経験の有無において「中」は留学中、すなわち現在日本で日本語を学んでいることを意味する。学習者情報の無いものは、筆者による作例である

分析対象を、中国語を母語とする学習者に限定したのは、「漢字」という共通項が日本語学習の促進にどのような影響を与えているかを探るためである。母語での漢字知識が有用できれば、中国語を母語とする学習者にとって、非漢字圏の学習者に比べて日本語学習は容易なものとなり、短期間で日本語能力向上も望めるであろう。しかし、残念ながら筆者の知り得る限りでは、母語の漢字知識が、かえって「自然な日本語の習得」の妨げとなっている場合が多いと言える。学生の国籍を問わず、やはり母語の干渉は存在し、似通った誤りもするであろうが、今回は、「漢字」という共通項に重点を置いたこと、そのため中

国語を母語とする学習者に限定したことをここに書き添える。

加えて、「語の形の誤用」のみを分析対象としたのは、先ず、先行研究において本稿のような視座に立ち分析対象を抽出した研究が見えないからである。これは、対象語の分類・分析が複雑なものとなることも影響しているのかもしれない。そして、選択した語が正しいにもかかわらず誤用となるのはどのような要素が原因であるか（やはり母語の干渉であるか）を分析するためである。

次章に、学習者の誤文に従い問題が生起する箇所・項目別に分類し、その原因を探る。なお、誤用例に附した中国語訳は、筆者によるものである。

4 語の形の誤用例

4-1 スル動詞

今回分析対象とした語の形の誤用例であるが、先に述べたとおり、これらの誤用例は選択した語は正しいが誤文となるものである。つまり、用いた語の形を変えれば、正しい文となるものと言える。その中で一番多かったものは、日本語においては動詞として用いることがない語を動詞或いは動詞性の語としてしまっているものである。この分類は更に二つに分けることができる。一方は、中国語においては動詞として用いるという母語の干渉によるものである。もう一方は、中国語においても動詞として使用することはなく、これまでに習得した日本語文法の法則などの既習事項が原因となり、誤文が生じるものである。

4-1-1 中国語で動詞として用いる語

以下に、日中両国語で品詞が異なる（日本語では動詞としては使用しないが、中国語では動詞としても用いる）ことが原因にある例を挙げる。

- (1)そして、企業における仕事している女性の実況をずっと關心している。(女、2年、上級、中)
- (2)中国は外国の例を参考して、自分の問題を解決したほうがいい。(男、4年、中級、無)
- (3)今の若年層が晩婚化、未婚化傾向している。(女、3年、上級、中)

(1)と(2)は中国人日本語学習者の誤用例として、有名なものである。中国語では〈關心〉〈参考〉ともに、動詞として使用する。日本語学習において、「關心がある/關心を持つ」も「参考にする」も、中級レベルであれば導入される（された）語であり、意味が難しい語では決してない。にもかかわらず学習者の誤用がなくなるのは、やはり母語の干渉であり、日本語で作文を書くときにも先ず母語で考えて、それから日本語に置き換えて書

くという学習者の思考パターンの表れとも言える。顧（1981：61）は他にも品詞の誤認による誤用例として「犠牲」「必要」などを挙げる。やはり中国語で動詞としても用いる語を、日本語でも母語そのままに使用する誤用例は多いと言える。(3)の〈傾向〉は「思想・意見などが（一方に）偏っている、～という傾向にある」という意味で用いる語である。上記二例と同じく母語の干渉に起因することは明らかであるが、この例に関しては他の原因の存在も考えられる。それは、辞書である。上記二例と比べ、使用頻度があまり高くないとされるこの語は、先ず母語で表現したい内容を考え、次に日本語に翻訳する際、日本語にも同様の語があり、同様の使い方をするのかを確認したことが推測されるからである。筆者が担当した作文の授業では、実際に書くのは授業外の課題とすることが多く、学習者は自身の表現したい内容を辞書やインターネットを参考に書くことがほとんどである。日本語の「傾向」の項には[名]（～スル）と記載されているので、その部分を参考にし、中国語と同様の使い方をしたとも考えられる。

4-1-2 中国語でも動詞としては用いない語

以下は、中国語でも動詞としては使用されない語の例である。

- (4) この視点から見て女は男より長寿している。(女、3年、上級、無)
- (5) 現在の飼い主はペットに余計の面倒をするので、かえってペットの健康に悪いと考える。(女、3年、上級、中)
- (6) 話題した流行の商品がそろっている。(女、6年、上級、中)
- (7) そうすると、深刻しないとされる。(男、4年、上級、中)
- (8) 中国でこの問題が今後深刻することを述べる。(男、3年、上級、中)
- (9) しかし、恋愛や結婚のイメージが抽象してきており、どうしたら実際に恋愛を成就できるかが分からない男性もいるようだ。(女、1年、中級、中)

上記六例は、中国語でも動詞としては使用しない。従って、母語が原因となる誤用例ではない。その原因は、日本語学習を開始して間もなく覚えたⅢグループの動詞の存在ではないかと考える。Ⅲグループの動詞はスル動詞とも呼ばれるもので、スルを取れば名詞となる。この法則を応用し、動作性を伴う名詞にスルを加えると動詞になると考えたのであろう。この考え方は一概に間違いであるとは言いきれないが、必ずしもそうなるとも言いがたい。その上、(4)～(9)が動作性を伴っているかと言われると、むしろ状態性を伴っていると言えるだろう。これらの誤用は、文法法則を一般化させ過ぎたことによるものであろうが、例えば(4)は「長寿である」と「長生きしている」の混同とも考え得る。(5)の「面倒をする」は「面倒をみる」から同義語の「世話する」に学習者の思考が移り、「世話する」

ならば動作性を伴うという結果に落ち着いたのかもしれない。また、(6)もやや強引ではあるが、「(私たちが先日) 話題にした」の助詞が脱落した誤用例と見ることもできる。(7)～(9)は、「化」を加えることでも表現として落ち着く。従って、接尾辞「化」の脱落とも取れる。

4-2 変化を表す「になる」

次に挙げる例は、以前と比べ状況・状態が変化したという意味を強く打ち出そうとした結果生じた誤りであろう。

- (10) 50年代から、中国の社会環境は安定になった上で、医療衛生もよくなった故に人口は急激に増加した。(男、3年、上級、無)
- (11) 最近、観光地や公園などのごみ箱が少ないため、ポイ捨て問題が深刻化になっている。(男、4年、上級、中)
- (12) やっと寝付きになりました。(女、3年、上級、無)
- (13) 契約する前にはっきり協定し、子供が生まれた後、代理母と子供と養子縁組になるのもよくないと思う。(女、3年、上級、中)

これらの例は全て、変化の意を表す「になる」を加えたために誤文となったものである。初級段階において、イ形容詞は「くなる」を加え、ナ形容詞は「になる」を加えることで変化の意を表すことは習得済みのはずである。(10)の「安定」は日本語では名詞或いはスル動詞として用いられるのが常であるが、辞書によっては形容動詞(日本語教育においてはナ形容詞)との記載も見られる。不安定な状態から安定した状態に変化したという意を積極的に表したいがために、「になる」を加えたのだろうと推測される。(11)は「深刻」に接尾辞「化」を加え、さらに、変化の「になる」を重ねた複雑な誤用例である。日中両国語において「化」は状態や性質の変化を意味する接尾辞である。日本語では「～化する」という形にすることによって変化の意が添加されることを恐らく知らず、「になる」を加えたのではないだろうか。(12)は「寝付く」が動詞であるにもかかわらず、「になる」を加えた誤用例である。確かに動詞をマス形にすれば名詞の形とはなるが、それは名詞であり、ナ形容詞にはなり得ない。(13)の「養子縁組」も名詞でしか用いない語である。状態・状況の変化に重点を置いて、「になる」を加えたのだろうと思われる。上記四例は、学習者が間違えるに至った背景が4-1-2の誤用例と同類だと言える。日本語文法の基本法則に従ったが故の誤りである。

4-3 名詞及び形容動詞の名詞修飾

以下の例は学習者にとって難しく、頭を悩ませるものであろう。

- (14) 生きている人は死んでしまった人に尊敬な気持ちを持って、お墓の前で「冥錢」を燃やす。(女、3年、上級、無)
- (15) 日本社会で大部分な女性を結婚したあと、主婦になる。(女、2年、上級、中)
- (16) 現在の飼い主はペットに余計の面倒をするので、かえってペットの健康に悪いと考える。(女、3年、上級、中)

日本語の中で、名詞と形容動詞の性質を兼ね備えるものが少なくない。名詞が名詞を修飾するのであれば「の」を補い、形容動詞が名詞を修飾する場合は「な」と活用させる。上記三例は、品詞を誤認したことに起因するものか、「の」を加えるか「な」と変化させるかがあいまいな状態だった(文法法則が身に付いていない)ことに起因するものであろう。恐らくは後者である可能性が高いと思われる。学習者の話によれば、新出単語を覚える時、または表現したい語を辞書で引いた時、確認するのはその語の基本形と意味、及び対応する中国語であるという。ここから考えるに、品詞や例文まできちんと確認し、語の基本的な使い方を正確に覚える作業を丁寧にする学習者は、それほど多くないのだろう。多少丁寧に例文まで目を通した場合においても、それで正確な語の意味・用法が確実に身に付くわけではなく、更に別の要素が絡んでくる。それは辞書の詳しい説明と用例である。辞書の用例の中には、日本語母語話者の理解表現ではあるものの、使用表現ではないものも少なからず見られる。しかし、学習者にそれが分かるはずもなく、その用例を目にしたからこそ誤文を生み出してしまうのである。

4-4 副詞及び形容動詞の用法

以下に挙げる副詞・形容動詞(副詞的に用いるものも含む)も、学習者にとって正確な形・用法を定着させるのは困難を伴うもので、誤文が生じやすい。

- (17) これから雇用関係が益々に注目を浴びている。(女、3年、上級、中)
- (18) 動物愛護団体は、直接にイルカの漁猟を妨害したり、ドキュメンタリー映画で非人道的なイルカ追い込み猟を社会に表したりしている。(男、2年、上級、中)
- (19) それで、火を点けた時、不注意に自分の毛に火を点けた。(男、3年、上級、無)
- (20) 毎日夢中で想像していました。(女、2年、中級、無)

(17)のような誤用例も、しばしば目にするものである。日本語の副詞には「に」を伴う

ものが存在する。そこから、副詞には「に」を加えるという法則を勝手に作り出してしまったため、「ますます+に」としてしまったと考えられよう。そのほかに、「段々に」もよくある誤用例である。しかし、これらを学習者が作り上げた文法法則による誤文(4-1-2と背景を同じくするもの)だと言い切るのは難しい。なぜなら、多くの辞書に「「に」「と」を伴っても使う」との記載があるからである。間違いを指摘した際に、「でも、辞書に書いてあります」という学習者の発言を今までに何度となく聞いた。上にも述べたとおり、課題として与えた作文は辞書を引きながら書く学習者がほとんどである。外国語を勉強する際に、辞書を使用しない学習者はいないと言っても過言ではないほど、辞書は外国語学習に欠かせないツールとなっている。この辞書というツールをいかにうまく外国語学習に用いるか、これは教師側にとっても課題であろう。(18)の「直接」を副詞的に用いる場合、助詞は加えない形が普通であろう。しかし、これも(17)同様、辞書によっては「「に」を伴っても用いる」とある。そのような補足説明が記載されていながらも、用例はすべて「直接」という形で示されている辞書がほとんどである。この二例に関しては、辞書という便利なツールが一般的になったことによる誤文かもしれない。(19)は、注意が足りないことが原因で別の事態が発生するという意味の文であるから、「不注意で」という形となろう。(20)は少々複雑である。「夢中」という語は、「夢中で」「夢中になって」という二つの形で用いられる。しかし、両者には細かい差が当然あり、「夢中で」とする場合は、何かを行う際にそれ以外のことを考える余裕が全くない様子や状態を示す。一番多く共起するのは「逃げる」であろう。

(21) 誰かに追われているような気配を感じて、夢中で逃げた。

この場合、当然「逃げる」という行動に集中していたと解釈し、「夢中になって」と置き換えることも不可能ではないが、それより「逃げる」以外のことを考える余裕がない状況、緊迫感があり、差し迫った状況という意味合いが強いため、ここではやはり「夢中で」という形が自然であろう。(20)を見ると後ろに続くのは、「想像していました」である。一般的に「想像する」という言葉は、自由に思想を巡らせ考えるという意味であり、主体となる人間が自主的にそういう状態になっている場合に用いる。従って、「夢中で」を用いると、文中の感情にずれが生じ、誤文となる。この誤文は、「夢中で」「夢中になって」という語を習得した際に使用環境・条件に注意を払わなかったこと、二つの表現が存在しているが、小さいながらも差異があることを知らなかったことなどが原因になったと考えられる。

4-5 不完全な表現

4-5-1 接尾辞の脱落

続いての例は、接尾辞を加えれば日本語らしい文となろう。

(22) 政府が補助金を与えたら、相對に国民の税金が増えて経済の負担になる。(女、3年、上級、中)

(23) クラクションを鳴らすのは、声より直接な表現だと思っている。(男、2年、上級、中) 〈我觉得按喇叭是比说话更直接的表现方式〉

上記二例は「的」を加えることで日本語の表現として落ち着く。中国語に「的」という接尾辞は存在しない。接尾辞としては存在しないが、中国語における「的」は連体修飾語を構成したり、文末において特定の意味を強調したりと文法的に重要な役割を担っている。(23)の中国語訳に見える〈直接的表現方式〉の構造は〈直接+的+表現方式〉であり、〈直接的〉が一語ではない。このことから「的」の脱落は中国語の文法法則の影響によるものであると思われるが、中国語文法における「的」の役割、用法をも分析した上で判断すべきであると考えるので、さらなる議論は別稿に譲る。なお、近代中国における日本語の形容詞化接尾辞「的」の受容と変遷は稲垣(2010)に詳しい。

4-5-2 状態を表す語彙

日本語においては、常に状態を表す形で用いる語も多く存在する。

(24) 08年の「労働契約法」の中に、派遣社員についての規則は初めて独立の章として詳しく規定されている。(女、3年、上級、中)

(25) この名前は表面から見れば矛盾かもしれないが、もっとその前提を考えると正しい理解が取れる。(女、2年、中級、無)

(26) また、通学時間や遊ぶ時間が節約できるし、集中で勉強することもできる。(女、2年、上級、中)

(27) たぬきは油断で火炎にしっぽの毛が焼き始めた。(女、3年、上級、無)

(筆者注：たぬきは油断をしていたので、しっぽの毛に火がついてしっぽが焼け始めたの意)

上記四例は、日本語母語話者でも誤文とするかどうか、意見が分かれる可能性が大きいものであろう。「独立」を連体修飾語として用いる場合、「(経済的に或いは商売上) 独り立ちした」という意味での使用を除き、「独立する/している/した」という状態を表す形とな

る。同様に、「矛盾」「集中」「油断」も「する/している/した」が一般的であろう。4-2に挙げた(10)の「安定」も、連体修飾の場合には状態性を伴う形で用いる語であるが、しばしば見受けられるのが、(28)に見られるような誤文である。

(28) 将来、いい会社に就職して安定の生活をしたいです。

これらの誤用例は、語の用法が少々なおざりにされていることに起因すると言えるかもしれない。

4-6 不自然な表現

以下は語の選択も文自体も明らかな誤りはないが、日本語として不自然さがぬぐえない例である。

(29) 私は日本に来てからよく不用心に自転車の鍵をかけるのを忘れてしまう。(女、2年、上級、中)

日本語において「不用心(無用心)」は、「～のは不用心だ」、「不用心にも～てしまう」という構文で用いることが多い。従って、(29)の例も以下のように改めれば比較的自然的な日本語となるであろう。

(29') 自転車の鍵をかけないのは不用心だが、私は日本に来てからよく鍵をかけ忘れてしまう。

「不用心」という語が中国語には存在しないため、学習者は〈不小心〉(注意などが足りない様子を表す語)を辞書で引き、日本語にしたものと思われる。その際、語の使用法までは確認をせず、中国語と同じ使い方をしたのではなかろうか。このように考えると、この例も母語の干渉と言えるだろう。

続いて以下の三例は、母語をそのまま日本語に直訳した誤用例と言える。

(30) 血液型だけで人の性格を決めつけるのは不足だと思います。(女、2年、上級、中)
〈单凭血型断定一个人的性格是不够的〉

(31) なぜならわかりませんが、とても感動させた。(男、3年、上級、無)
〈我不知道为什么，被感动了〉

(32) 時々新聞と雑誌から星座と干支の占いを見て、その日を愉快的に過ごせるように。

(女、3年、上級、中)

〈为了渡过愉快的一天，有时会看报纸和杂志上的星座和干支的占卜〉

これらは語の使用法のみならず、文の構成も中国語文法に沿った中国語的表現である。(30)は、「人の性格は血液型だけでは決められない」としたほうが、より日本語らしい表現になるだろう。

(30)人の性格を決めるのに、血液型（という要素）だけでは不足している。

ただ、学習者の書いた文を見ても、言わんとしていることは伝わる。日本語における「不足」は、状態を表す形で用いることが多い(4-5-2参照)。その上、共起する名詞は、金額・人数などの数量を表すものであり、それ以外は「能力不足・睡眠不足」のように名詞相当の語として使用する。(31)の「感動する」は日本語ではほとんどの場合が人を主体とし、「(私は)感動した」と使用するが、中国語は感動するという感情が引き起こされた情景、情況を中心に述べるほうが一般的である。同様に、感情を表す「驚く」なども学習者は「(私を)驚かせた」と使うことが多い。誤用だと完全に言い切ることは難しい用例だが、日本語母語話者なら使わない形であり、自然な日本語とは言えまい。望月(2009:100)にも、使役形式の誤用に関し、以下のようにある。

中国語母語話者である日本語学習者に、「させる」を付加することによる誤用が多いのは、中国語が「原因事象を表す文+使役標識を用いて結果事象を表す文」という文型を基本文型の一つとすることに起因する。

また、サ変漢語動詞を導入する際に、自・他分類に気を配ることで使役形式の誤用を減らすことができると顧(前出:61)は述べる。(32)の「愉快的」は、「愉快に」とするのが自然であり、日本語において「愉快的に」とは成り得ない。日本語学習者の「的」使用における特徴は、望月(2010:10-11)に見える。

5 語の形以外の誤りにおける傾向

第四章では語の形に焦点を当て、誤用例を分類しその原因を探った。以下は、選択した語自体に誤りがあるものである。

(33)「ええっ、冷たいな」と私は感覺した。(女、2年、中級、無)

(34)日本のサービスが素晴らしいと思うところは設備が完全することだ。(女、3年、

上級、中)

(35) 本当に信じているのではなく、自分をもっと楽観させるためです。(女、3年、上級、中)

上記三例は、中国語をそのまま日本語に持ち込んだ誤用例である。(33)については、中国語では〈感觉〉を「感じる」という動詞でも使うことに起因したものである。(34)の〈完全〉は、「すべて揃っている(その上、機能的にも素晴らしい)」という意味でも中国語では用いるが、日本語で「設備」と「完全」は共起しない。(35)の〈乐观〉は、「気持ちをリラックスする、楽にする」という意味があるが故の誤用だと思われる。

(36) もちろん、私ひとりではなく、警察の配合が必要です。(男、5年、上級、無)

(37) 今後、どんな挑戦に遭っても、その体験に応じて、ただできるだけ我慢すれば、私は乗り越えることができます。(女、3年、上級、無)

(36)の〈配合〉は「協力」という意味で使われる語であり、(37)〈挑戦〉は「挑戦しなければ越えられないような状況、苦境」という意味で用いられる。上記二例も中国語をそのまま使用した誤用例ではあるが、(33)～(35)とは異なり、日本語に存在する同形語と意味領域に重なりがないため、一見すると何を表しているのか全く理解できないものとなっている。

(38) ある日、家にいるとき母はいつも台所の仕事がとても重いと言いました。(女、2年、中級、無)

(39) バスは信号を待つ時、いつもエンジンを消すことも変だと思った。(男、1年、初級、中)

(38)と(39)は単に語の意味のみを追えば表現したい内容は理解できるが、日本語母語話者がこのような文を構成することはまずない。これらはコロケーションの誤りである。

また、同じくコロケーションの誤りと言えるものの中にも特殊な例がある。

(40) 黒は危険な意味を暗示する。(男、3年、上級、無)

(41) 私はたくさん夢を保有します。(女、2年、中級、無)

(42) これから、もし私たちはずっと環境を保持したら。(女、2年、中級、無)

上記三例も誤文ではあるが、日本語母語話者なら意味は理解できるであろう。それは日

本語にも同形語が存在し、意味もほぼ同じだからである。そのような語を使用したにもかかわらず、誤用となってしまう原因は、両国語における語彙の意味領域にあると考える。中国語における意味領域が日本語における意味領域を包含している、つまり、中国語の意味領域の一部として日本語の意味領域が存在しているような関係にあるため、中国語を日本語に直訳すると日本語らしい表現にはならない状況が出てくるのである。(40)の「暗示する」は日本語において、「AはBを暗示している」という構文で使われることが一般的で、未来の予測や起こり得る事態を示す時に用いられるものである。中国語の〈暗示〉は、以下に示すような使い方が一般的である。

(43) 〈他暗示我不要说话〉 (彼は「話すな」と私に合図した)

また、日本語で(41)の「保有する」と共起する名詞と言えば、「核・権利」などが挙げられる。中国語でも、日本語同様、「核」などとも共起するが、一定期間以上ある物を持っている状態を表すのにも用いる。

(44) 〈保有外汇〉 (外貨を持っている)

(42)の「保持する」は、日本語ならば共起する名詞として「記録」が一番に挙げられるだろう。中国語の〈保持〉は「記録」以外にも、以下のように人間の状態や外見などの用例がより多く見られる。

(45) 〈保持身体〉 (スタイルを保つ)

(46) 〈保持沉默〉 (沈黙を貫く)

(47) 〈保持笑容〉 (笑顔を絶やさない)

次に、「堅持する」の用例についても見てみよう。

(48) その時から私は自分の考え方を堅持することにしました。(男、3年、上級、無)

「堅持する」は日常会話で用いられることはほとんどなく、書き言葉として、確固たる信念や思想を持ち続けるという意を表す時に限り使用される語であるが、中国語の〈堅持〉は日常会話でもよく用いる。意味・用法は日本語とほぼ同じであり、〈堅持己見〉という成語もあるように、考え・思想を持ち続けるという意味である。

以上のような例は、日中同形語における日本語と中国語の意味領域、共起する名詞、語

の使用環境など、様々な影響を受けて起こる誤用である。当然のことながら、語の選択自体が誤りである誤用例のほとんどは、母語による干渉が原因であろう。しかし、そう言い切ることも簡単ではなく、複雑に様々な要素が絡み合っていることも予想される。それぞれをさらに細かく分析することで、誤用の生起環境、法則を明らかにすることを今後の課題としたい。

6 終わりに

今回は、中国語を母語とする日本語学習者の作文における誤用例、中でも、選択した語は正しいが誤用となる、語の形の誤用例を中心に、誤用を引き起こす原因となっている要素は何であるかを探るべく、分析を行った。分析を通して明らかとなった原因は、以下の四点である。

第一に、語の形の誤用も母語の影響を強く受けているということである。特に、品詞認識・文の構造という面に、その影響は顕著に表れている。中国語を母語とする学習者の語使用に関する研究と言え、第五章で挙げた誤用例と同類の、日中同形語に関する研究が多くを占め、語の形に焦点を当て分析を行った研究はあまりない。しかし、母語の干渉による誤用例が多く見られることが明らかになった以上、教師側にも何らかの対策を立てる必要があるのではないかと考える。語彙導入の際、意味ばかりでなく、用法や語の使用環境なども併せて教えるのが望ましいであろう。

第二に、日本語文法における一法則を一般化させすぎて、本来ならば適用させられない場面・条件で用いたことに起因し、誤文を産出する場合があるということである。この点は、初級段階から学んだ様々な文法項目がきちんと定着していないことが背景にあるのか、或いは当該法則がどのような状況においても効力を発揮すると過信しているためなのか、深く考えずに乱用していることが原因なのか、更なる調査・分析が必要となろう。文法の法則に完璧なものではなく、例外が存在することもさることながら、文法導入の際にはどのような条件下で用いる文法なのかということも明示しなければならない。

第三に、辞書への強すぎるほどの信頼、辞書を単に参考にするだけでなく、語の用法におけるバイブルのような扱いをしていることから、不自然な表現・文が作り上げられてしまい、誤文となり得るということである。この点は、更に、中国語を母語とする日本語学習者の作文中の語彙が、漢語に偏っていることとも関連があると考えられる。非漢字圏の学習者であれば、学習段階に応じた語彙で文を作る。中国人学習者の場合は、母語で使用する語と同形で意味・用法も大差のない語が日本語にも存在することを知ると、その語を用いて文を作る。その存在を知るためのツールが辞書である。辞書は、その語の意味や用法を説明してある点においては、外国語学習にはなくてはならないツールである。日本に来て日本語を学んでいる学習者であれば、生きた日本語に接しながら日本語を学ぶことが

できるので、たとえ辞書がなくても日本語学習が不可能になるとまでは言えないが、母国において日本人教師が少ない環境で日本語を学んでいる学習者にとっては、それが絶対的な存在となってしまうことも理解できる。このような辞書への依存を解消するのはなかなか難しく、一筋縄ではいかない問題であろう。また、辞書を引くことが決して悪いことではなく、むしろ自主的に学ぼうとする姿勢の表れでもあるので、教師側にしても辞書を使用することに関しては、強く否定するわけにもいかない。日本語学習者のためだけに辞書を編纂する（編纂し直す）のも一つの解決策にはなるだろうが、結局のところ、誰が見ても完璧な辞書を編纂することは不可能に近い作業となろう。しかしながら、例えば、授業で用いる教科書にその教科書だけの辞書（語の意味、用法、注意点、例外事項）をつけることで、教科書で目にする新出単語の意味・用法などは確実に定着する可能性は高まる。

最後に、中国語には存在しない漢字語の使い方は、やはり定着までにかかなりの時間を要するので、定着途中の段階での誤りが目につくということである。この点は、教師側の工夫だけで解消されるものではなく、学習者自身の努力が欠かせない。学習者はよく、言葉の意味を覚えるのは簡単だという類のことを口にする。確かに漢字は、古くは中国から日本にもたらされたものであるから、そのように考えるのも無理はない。しかし、中国語には存在しない日本語独特の用法が数多く存在している現在においては、学習者の語彙学習に対する考えを変えさせること、語彙学習自体の方法の見直しも必要であろう。例えば、初級段階で漢字圏であるという利点を敢えて排除し、ひらがなのみで書かれた教科書を用い、語の定着を図った後で改めて漢字を提示するなどは、あまり現実的ではないかもしれないが、そのような方法でしか根本的な意識改革は不可能かもしれない。

今回の調査・分析では、残念なことに、学習者本人に誤文を生み出した原因が何であるかを聞くという追跡調査まではできなかった。今後作文指導で誤用についてフィードバックを行うと同時に、その原因も探れば、学習者がどのような思考回路で（中国語を介したのか、或いは日本語のみで考えたのかなども含め）誤文を産出するに至ったかがより明確なものとなるだろう。原因が明確になれば、今回の分析・分類もより厳密なものとなるであろうが、その点は、今後の課題としたい。

参考文献

- 石黒圭（2004）「中国語母語話者の作文に見られる漢語副詞の使い方の特徴」『一橋大学留学生センター紀要』7 一橋大学留学生センター, pp. 3-13.
- 稲垣智恵（2010）「近代日中における「的」の受容」, 『東アジア文化交渉研究』第3号 関西大学, pp. 279-299.
- 金庭久美子他（2006）「日本語学習者のための電子辞書編纂の基礎調査—辞書利用についてのアンケート調査—」『*Japanese Language Education in Europe*』vol. 10, pp. 77-82.

- 顧海根 (1981) 「中国人学習者によくみられる誤用例 (二) —動詞, 形容詞, 代名詞などを中心に—」『日本語教育』44号 日本語教育学会, pp. 57-69.
- 竹田治美 (2004) 「「日中同形類義語」について」『人間文化研究科年報』第20号 奈良女子大学大学院人間文化研究科, pp. 335-342.
- 陳月吾・杜英 (2010) 「類義的な漢語語基の日中比較—「回・帰・返・還」を対象として」『福井工業大学研究紀要』第40号 福井工業大学, pp. 586-592.
- 中西泰洋 (2003) 「語彙教育を考える—表現語彙を中心として—」『神戸大学留学生センター紀要』9 神戸大学留学生センター, pp. 45-57.
- 中野洋・張建華・林翠芳 (1997a) 「中国人学生の日本語作文調査」文部省科学研究費 (創成的基礎研究費) 「国際社会における日本語についての総合的研究」(研究代表者 水谷修) 研究報告集, pp. 35-42.
- 中野洋・張建華・林翠芳 (1997b) 「中国人の日本語文章における中国語の影響」『言語処理学会第3回年次大会発表論文集』言語処理学会, pp. 169-172.
- 西谷まり (2004) 「社会科学分野で使われる日中同形異義語」『一橋大学留学生センター紀要』7 一橋大学留学生センター, pp. 15-28.
- 菱沼透 (1980) 「中国語と日本語の言語干渉—中国人学習者の誤用例—」『日本語教育』42号 日本語教育学会, pp. 58-72.
- 藤田昌志 (2001) 「誤用例の研究—中国語を母語とする日本語学習者の場合 (I)」『三重大学留学生センター紀要』3 三重大学留学生センター, pp. 1-12.
- 藤田昌志 (2002) 「誤用例の研究—中国語を母語とする日本語学習者の場合 (II)」『三重大学留学生センター紀要』4 三重大学留学生センター, pp. 1-11.
- 藤田昌志 (2003) 「誤用例の研究—中国語を母語とする日本語学習者の場合 (III)」『三重大学留学生センター紀要』5 三重大学留学生センター, pp. 29-37.
- 望月圭子 (2009) 「中国語を母語とする上級日本語学習者によるヴォイスの誤用分析—中国語との対照から—」『東京外国語大学論集』第78号 東京外国語大学, pp. 85-106.
- 望月通子 (2010) 「接尾辞「～的」の使用と日本語教育への示唆—日本人大学生と日本語学習者の調査に基づいて—」『関西大学外国語学部紀要』第2号 関西大学外国語学部, pp. 1-12.
- 陽際元・川嶋秀之 (2009) 「中国人日本語学習者に見られる「～て(で)」の誤用について」『茨城大学教育学部紀要 (人文・社会科学, 芸術)』58号 茨城大学教育学部, pp. 1-11.